

唯物史観

中山 勉

(村上重良「唯物史観」『宗教学辞典』1973年版に続けて)

〔旧版からの歴史的変化〕 政治的指導原理として唯物史観を採用すると公言してきた「社会主義」ブロックの崩壊(1989-91)と、それら諸国の資本主義化により、現実政治の場における唯物史観の命脈は絶たれることとなった。これは、次項で見る「唯物史観の公式」が提示した、〈資本主義社会の後に理想郷としての共産主義社会が必然的に到来する〉との予測が、〈そもそも(共産主義の前段階としての)社会主義社会が理想郷とはほど遠いものであった〉という事実によって裏切られたことを理由としている。ここでいう唯物史観の「予測」とは、何か宗教的な連想を抱かせる「預言／予言」とは異なり、マルクス経済学が「証明」した労働者側の「絶対的窮乏化法則」、資本家側の「利潤率の傾向的低下法則」により、数学的正確さをもって見通せる事柄であると信じられてきた。これらの「法則」の空振りによって唯物史観は史実により反証されたことになるのだが、観点を替えてみるなら、カール・ポパーのいう「反証可能性」が現実レベルで適用されたという意味において、ここに他ならぬ科学性が認められたということも可能である。思想、哲学の分野において *Falsifiability* の基準が用いられ、結果として実効力がないと宣告されるケースは希有であるに違いなく、「科学的社会主義」という唯物史観の別称は、逆説的ではあるが、誤りではなかったともいえることになる。

現在ではマルクス主義の研究人口そのものが激減しているため、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスが構築した学問としての唯物史観が、特に宗教学の分野において有意性を保ち得ると考える根拠も稀薄に感じられる。しかし唯物史観にはこの間の歴史変動にも拘わらず依然として効力を維持している部分も存在するため、旧項目の説明に加えて、マルクス、エンゲルスによる宗教分析を具体的に特記することにより、この方法が持つ意義をさらなる宗教研究に活かすことも可能だろう。このような考えから、1990年代以降、多くのマルクシアンが多くの学問分野でなしてきたアポロギーはここでは行わず、唯物史観による直の宗教観察の一部分を本辞典の記録に留め、後学の参考に供することとする。

〔唯物史観の公式〕 マルクスは1859年の『経済学批判』序言において、後に研究者によって「唯物史観の公式」と呼ばれることになる以下の文章を残している。宗教学に限らずマルクス主義が持っていた学問横断性・通用性は、人間の存在からその思想と制度の有り様を解き明かす、以下の方法の独自性に多くを負っていたものである。

人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはい

る。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。

（社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。その時に社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化と共に、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる。）〔パーレンは引用者による・原文無改行〕

このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、それで人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかって決着をつけるところの法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とを常に区別しなければならない。ある個人がなんであるかをその個人が自分自身をなんと考えているかによって判断しないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識との間に現存する衝突から説明しなければならない（『マルクス・エンゲルス全集第13巻』（杉本俊朗訳）大月書店、6・7頁）。

〔宗教学にとって未だ有効な部分〕 上記引用中、パーレンで括った部分は、原始共産制から奴隷制、封建制、資本制への非可逆的な社会構成の進展を説明する原理としては有効であっても、これら「人間社会の前史」の後に共産制社会の到来を予言していた点（これは「鉄の法則」に従うとされる）において、前述の通り、歴史的に反証されている。これに対してそれ以外の部分は、科学的な確定は困難であるが（あるいはそれゆえに）、人間社会の枠組みの中に存在する〈イデオロギー（宗教もその中に含まれる）〉を理解するひとつの方法を未だ有効に提示していると思われる。社会が経済的に安定すると保守的な宗教が勢力を増し、同時に社会の安定化のために保守的に解釈された宗教が利用されてきたのは歴史的事実としておおかたの認めるところだろう。注意を要するのは、上記の引用からだけでは明らかではないが、ここで挙げられている「法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態」のうち、ひとり宗教のみが共産制社会の到来により最終的に消滅するものと唯物史観によって看做されている点である。ここにおいて「下部構造が上部構造を規定する」方法が、宗教においては純粹な現れ方において認められている、つまり、法律・政治・芸術・哲学の諸イデオロギーは、革命後においても共産制社会の下部構造に照応した形態で存続するのに対して、階級対立がもたらす自己疎外の反映でしかなかった宗教は、その対立の止揚により、必然的に時間をかけて「眠り込む」ということである（但しエンゲルスは晩年にこの立場を修正し、人間が外的な自然的・社会的な諸力の支配のもとにある限り、宗教は存続し得るとしている）。これは、マルクスの時代には宗教が既成の政治的現実を聖化する道具と化していたという歴史的事実を背景とするものだが、マルクス主義が宗教に対して

敵対的であるという支配的観察は、ひとつには（よく知られた「阿片」言説というよりも）この〈消滅すべきものとしての宗教解釈〉を根拠としていると考えることが可能である。

本辞典（『宗教学辞典』）において「マルクス主義」や「弁証法的唯物論」ではなく、特に「唯物史観」が項目として立てられたのも、この時間軸を練り入れた独自の方法が持つ〈精神的活動としての宗教との（否定的）関わり〉の特異性をそのひとつの理由にしていると思われる。

【マルクス、エンゲルスによる宗教の観察】 マルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」（1843年）にある「宗教は阿片である」云々のみがよく知られているが、マルクスとエンゲルスは、多くを語らないながらも、唯物史観による幾つかの重要な宗教観察を残している。1845年に書いた「フォイエルバッハに関するテーゼ」においてマルクスは、「フォイエルバッハは宗教の問題とは結局人間の問題である、というふうに解消する。しかし人間の本質は、個々人に内在するいかなる抽象物でもない。人間の本質は、その現実性においては社会的諸関係の総体である」（第6テーゼ）とし、続く第7テーゼでは、「それゆえにフォイエルバッハは、『宗教的心情』そのものが社会的に生み出されたものだということ、そして彼が分析する抽象的個人が、ある特定の社会形態に属するというのを見ようとしない」と記している。ここから分かるように、唯物史観は、宗教現象を歴史的な文脈と類としての人間関係を前提としてのみ科学的分析の俎上に載せる。それはどこまでも「社会的関係の総体」のひとつの歴史的発現形態であり、したがって、「宗教それ自体も空虚として天空によって生きているのではなく、大地によって生きているので、この宗教を自己の理論とする倒錯した現実〔自己疎外をもたらす階級社会のこと〕が解消すればそれと共に宗教も自ずから崩壊する」（「ルーゲ宛1842年11月30日付手紙」）という結論を得る。より詳しくいうなら「宗教は人間の本体を空想的に表現したものである。というのは、人間の本体が〔階級社会においては〕真の現実性を持っていないからだ。だから、宗教に対する闘争は、間接的には、宗教をその精神的香料とする世界〔資本制社会のこと〕に対する闘争」（「ヘーゲル法哲学批判序説」）ということができる。しかしマルクスの宗教批判は必ずしも激しい闘争の成果として得られたものではなく、「宗教の批判は、人間が人間にとって最高の存在であるという教説で終わる」（同上。強調はマルクスによる）と彼によって宣言される時、その視野にある〈人間解放〉というビジョンは、虚偽意識としての宗教を見下ろしながら、これを大きく呑み込むものであったということである。マルクスの死後、エンゲルスは宗教分析により細かい図式を与えている。後のレーニン宗教論（「社会主義と宗教」1905年）に繋がる観察として、エンゲルスは宗教が一般的に階級的な形を持つものであるということを強調する。「宗教というものは、ひとたびそれが形成されると、そこに常にある伝承の素材が含まれてくる。もちろん宗教に限らず、すべてイデオロギーの領域では、伝統がひとつの大きな保守的勢力をなしている。だが、しかしこの伝統的素材の上に起こる変化は諸々の階級関係から、したがってこれらの変化を企てる人間の経済的諸関係から発生する」。同じ教会で同じ神に同じ祈りを捧げる資本家と労働者が同一のエクレスシアを形成していると信じるのは自由だが、神に到達すべくなされる求神過程の条件が異なる以上、エンゲルスによるなら、その「神」は別種のものだということになる。「宗教というものは非常に野生的、原始的な時代に人間が自分自身の本性や自分を取り巻く外界の自然的本性に関して抱いた誤った野性的表象から発生したものである」のだが、「このような思想過程

は人間の頭脳の中で行われるのであるが、この思想過程の進行が結局のところこの人間の物質的生活条件によって規定されているものであるということは、この当の人間には必然的に意識されないでしまう」（以上の引用は「ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」1888年）。総じてエンゲルスはマルクスの唯物史観による宗教論を〈総論〉として、それを宗教内部にある階級制にまで掘り下げて応用しているということができるだろう。

ところで、これに対して唯物史観、より広くはマルクス主義全体をひとつの擬似宗教と捉える批判的立場も存在する（最も著名かつ古典的なのはニコライ・アレクサンドロヴィチ・ベルジャエフ（1874-1948）によるマルクス主義批判である）。キリスト教における千年王国論は一ごく簡単に描写するなら一現世を支配する邪悪な勢力が神の力により転覆され、その後に至福千年が続くとする神学思想であるが、ここでの〈現世〉を資本制社会に、〈邪悪な勢力〉を資本家階級に、〈神〉をプロレタリアートに、そして〈至福千年〉を共産制社会に置き換えるなら、宗教としてのキリスト教とマルクス主義の類縁性は明らかなように見える。正統による異端弾圧も両者の共通傾向であるとされるだろう。この説はマルクス主義の宗教敵対性を逆に揶揄するために動員されることがほとんどだが、前述した「反証可能性」を持つ科学としてのマルクス主義理解と合わせて、そこに見られる〈準科学—準宗教〉としての両義性は宗教学の見地からも興味深い事象であろうと思われる。

【誤解を招く命名】 この項目においてマルクス、エンゲルスの生の言葉を比較的多く引用してきたのは他でもない、世界中の研究者によって用いられてきた「唯物史観」という命名がミスリーディングであることを指摘したいがためである。マルクスの方法とは〈唯だ物によって歴史を観る〉やり方とはほど遠く、実は「物（material）」とはマルクス主義歴史観にとっては単なる「材料（material）」であるに過ぎない。試みに上記の「公式」、あるいは他の引用群を注意深く読むならば、マルクスのテーゼは「物」を根拠としたのではそもそも成立し得ないことが分かるだろう。マルクス主義において究極的に重視されるのは、人類のそれぞれの歴史的発展段階における「生産諸関係の総体」であり、これは「物」よりも遙かに高次のインプリケーションを持っている。無理に一点に絞り込むなら、この関係概念は人間が持つ歴史的生産能力に凝結することになり、物を有機的に利用する能力の展開と表現した方が正解に近い（ここにおいてマルクスの自然哲学が関係してくる）。上記フォイエルバッハに関する第6テーゼからも明らかなように、マルクスは人間と人間の「関係性」の徹底した分析を根拠として自らの学問体系を構築しており、「唯物史観」との単純きわまる命名は、フォイエルバッハからの連続を強調するための、もしくはヘーゲルの観念論を「顛倒」させるための、善意の学者による誤った命名と考えた方がよしい。管見の限りでは、マルクス、エンゲルスは自らの方法を「唯物史観」と呼んだことはない。「物」ではない「関係」が上部構造を規定すると正しく理解するならば、この方法が持つ宗教学に対する意味合いもこれまでとは異なる印象を帯びることになるだろう。

ちなみに近年の宗教学者の中では、ブルース・リンカン（Bruce Lincoln）が宗教学に唯物史観を適用した代表的研究者であるとされる。リンカンによると宗教とは「本質において他のイデオロギー形態と異ならず、それ自体中立的であり、いかなる階級によっても用いられる」ものとされ、それは「体制宗教、抵抗宗教、革命宗教、そして反革命宗教」の4種に分類されるという。

「革命」を論じてはいるものの、このような宗教理解がどの程度、上で見た唯物史観に沿ったものであるかは議論が分かれるであろう。また、ローランド・ボア（Roland Bohr）はネイティブ・アメリカンの「解放」を主題にした宗教研究をなした点でマルクス主義的な宗教学者とされているが、唯物史観とは被抑圧民族ではなく、まずは高度に資本主義化した都市労働者を射程に入れた解放理論であることを忘れてはなるまい。

【宗教学における位置づけ】 前述の通りマルクス、エンゲルスはいかなる意味においても宗教学者ではなく、宗教について発言する際にも、自らの方法たる「唯物史観」（括弧付き、と読む）を宗教領域に応用して対象を論じているのみである（このことは他の学問領域での業績についても言える。彼らは第一義的に経済学者である）。仮に「唯物史観」が既にして無効の学問方法であるなら上の引用群ももはや意味をなさないであろうが、必ずしもそうとは感じられない筈である。それは、宗教学において、（名称はどうあれ）「聖なるもの」を独立して仮構する研究方法、あるいは逆に共同体が持っている〈徴表〉とその機能を宗教の社会的役割として取り上げ論じるやり方とは明らかに異なる独自性と有効性を、「生産諸関係の総体」を基礎に置く「唯物史観」が持っているからである。「唯物史観」によるなら宗教をリジッドな実体として捉えることは原理上行い得ないから、展開によっては、旧来の宗教概念そのものを解体する宗教学のトレンドとも親和性を保ち得ることだろう。「どうしても我々は、あらゆる人間存在の、したがってまたあらゆる歴史の第一の前提、すなわち、人間たちは、《歴史をつくること》ができるためには、生きていることができねばならないという前提を確認することをもってはじめる必要がある。しかし、生きるために必要なものとは、なによりもまず、食べることと飲むこと、住居、衣料とその他若干のことである」（『ドイツ・イデオロギー』1845年。強調は引用者による）。

宗教という高度の精神的営みも人間の裸の生存と、そこでなされる「生産」を前提としている。誰にも動かすことのできないこの軸から宗教を分析する「唯物史観」の方法は、いかなる歴史的変転にも抗い続けるに違いない。

【参考文献】

- 『新マルクス学事典』（的場昭弘他編），弘文堂，2000年
 『マルクス・エンゲルス全集全49巻・付録1巻』（大内兵衛他訳），大月書店，1959-1991年
 『マルクスの言葉』（井上正蔵編訳），彌生書房，1971年
 霜田美樹雄『マルクス主義と宗教』，第三文明社，1976年
 丸山真男『日本の思想』，岩波書店，1961年
 ベルジャーエフ，N. 著『マルクス主義と宗教』（宮崎信彦訳），創元社，1953年
 Feuerbach, L. (tr. by Eliot, G.), *The Essence of Christianity*, New York, Prometheus Books, 1989(1841).
 Lincoln, B. (ed.), *Religion, Rebellion, Revolution*, New York, St. Martin's Press, 1985.